

# 戦闘機乗りな高校生と 愉快的な艦娘達の日常

ヘタレ檸檬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初投稿です。（ガチで）

至らぬ点があればすみません。

この小説にはキャラ崩壊が多く含まれます。また、文才皆無の筆者が書くため、無理だと思う方は早急に逃げてください。

それでも構わん！という方は、

ゆっくりして行ってね！

# 目次

- 高校生は突然未来へ放り込まれたよう  
です。 36
- 6話 高校生は出航するよう  
です。 36
- 7話 高校生は初戦で暴れるよう  
です。 45
- 8話 高校生は妖精達を扇動するよう  
です。 56
- 9話 隊長は姫相手に挑むよう  
です。 65
- 10話 高校生は深海棲艦を案内する  
よう  
です 前編 76
- 11話 高校生は深海棲艦を案内する  
よう  
です 後編 83
- 3話 高校生は艦娘「大鳳」と会話する  
よう  
です。 14
- 4話 高校生は妖精さんの暴走に絶句  
するよう  
です 21
- 5話 高校生は出発前夜に2度目の説  
明を受けるよう  
です。 29
- 2話 高校生は艦娘と遭遇するよう  
です。 1
- 高校生は見知らぬ場所で困惑するよう  
です 1



高校生は突然未来へ放り込まれたようです。  
高校生は見知らぬ場所で困惑するようです

俺こと都立高校に在籍する天海海斗は連休を使って旅をしていた。

もちろん連れなんていう大層なものはない。

ポツチである。

因みに今18歳でこれは彼女いない歴と同じだ。まあ仲の良かった近所の年下の子はいたが。

初めて夜行バスを使ったからか、緊張で眠りが浅かったらしい。まだ外は暗かった。

もう一眠りしようとしたその時、バスの側面にブレーキもかけずに突っ込んでくるト

ラックが見えた。

ブレーキかけてなさそうだなあ……ってそうじゃねえ！

このままじゃぶつかつちまうぞ！

一瞬の筈なのに、やたらとスローモーションで見えている。

乗客達に何ができるわけもなく、

ドガアアアン！という爆音とともにバスは盛大にひしやげた。

その直撃を受けた海斗も無事な訳はなく、押し潰されて即死した。確かに彼の存在はその時点でこの世から消え去った。

筈だった：

~~~~~

目が覚めたら砂の上に寝ていた。

目が覚めたら砂の上に寝ていた。

大事なことなので二回言いました。

…いや訳がわからない。

俺はバスに乗っていた筈だ。トラックが突っ込んできたことまでは覚えている。だが、何がどうしてこんな場所にいるのだろうか。

取り敢えず体を起こそう。さつきから聞こえてる音や風は内陸のものじゃ無いし

……

「あ、やっとおきたおきた」

「ねぼすけさんですな」

「からだのほうはだいじょうぶですかー？」

何かいた。

二頭身くらい小さい人間……人間か？

「こちらをみたままかたまつてるよー？」

「やつぱりどこかわるいんじや」

「わたしのびぼーにひとめぼれしたのよ！」

「いや、それはない」

「ぐすん（；ω；）」

めっちゃ喋っている。

俺は夢でも見ているのだろうか？

「君たちは何なんだ？」

「わたしたちはようせい」

「かんむすのおてつだいするのー」

「あまいものがだいすき」

「われこそは、だーくじえねらるー！」

何故だか一人人厨二病がいるようだが、成る程妖精と言うのか。

というかかんむす？知らない単語ばかりで混乱してきた。

「もう少し詳しく教えてくれないか？」

「これいじょうのじょうほうはたいかをようきゆうする！」

「われわれようせいにもじんけんを！」

「かんみをよこせー」

「こんぺいとうだとなおよし」

甘いものか。確かにユツクの中にバスの中で食べようとしてたお菓子がいくつつかあつた気がする。

その旨を伝えると、一時間程かけて教えてくれた。

内容をまとめていくと

15年ほど前に南極の調査船が生き物のような「ナニカ」に襲われたという通信を最後に通信途絶。その後、沖に出た船が消息不明になる事件が多発。

各国の必死の調査の結果深海から来た生物によるものだと判明。

政府は『深海棲艦』と命名。

ほんの数ヶ月で世界中の制海権は奪われ、シーレーンは崩壊した。

そんな中に艦の魂を持った娘、即ち艦娘が現れ、深海棲艦に有効打を与えることができた。彼女達によって少しずつ制海権を確保して、今に至る、と。

艦娘の武装には妖精の加護がつけられており、それによって深海棲艦のクラインファイルド的な something を貫くことができるそうだ。



「だれにはなしてるかわかんないけどそんなかんじー」

「さいどのせつめいごころー」

とまあそんなわけで話してくれた妖精さん達にはキャラメルのプレゼントをしておく。

「こんぺいとうじゃあないけどこれもよし。」

「うまうまー」

気に入ってくれたようだ。ほうばって食べてる。可愛い。

取り敢えずは、あの事故から20年程後の世界に来たという事だ。

なるほど完全に理解した（出来てない）。

「ところで、妖精さん達はここが何処とかはわかるか？」

「わからなーい」

「きづいたらここにいたー」

「じゃあ、海岸に沿って歩いてみるか。誰か見つかるかもしれないし。」

「「さんせーい」」

こうして俺は妖精さん達を肩に乗せながらこの世界への不安を胸に感じつつ、一歩を踏み出していくのだった。

## 2話 高校生は艦娘と遭遇するようです。

妖精さん達を肩に乗せながら俺は砂浜を歩いている。

砂浜は緩い弧を描きながら続いているようだ。意外と小さい島なのかもしれない。

そんなことを考えながら俺と妖精さんの会話は続く。

「ところでお前らは艦娘に会ったことはあるのか？」

「ないよー」

「ちしきとしてもってるだけー」

「だからはやくあうためにあるけあるけー」

「はいはい、仰せのままにつと。」

まあこんな感じで駄弁りながら、20分程歩いた。周りを見渡しながら歩いたもんだから正確な距離とかはわからないが800メートルほどだろう。最初にいた場所は完全に見えなくなっていた。

ふと、空を見上げると若干雲が見え始めている。

雨が降る前に屋根になりそうなものが見つかるといいなあ、なんて考えていたら、突然いつのまにか地面に降りていた妖精1人がさささーつと走って行ってしまった。か

なり素早い。

え？ほかの妖精は何してるんだって？背中や肩、頭の上で爆睡してますけど何か？  
流石に疲れてきたんだが…ん？走ってった奴が戻ってきたな

「いきなり走って行ってどうしたんだ？」

「えーとねーかんむすのけはいをかんじたからみにいつてたのー」

艦娘が？艦って着くぐらいだから艦隊で行動してるものだと思っただけど違うのかな？

「艦娘？単独でいるものなのか？」

「ぼくもふしぎにおもってたんだけど、ひどいけがしてたのー」

怪我？それならはやく助けに行かなくちや、のんびり歩いている場合じゃねえ！

「起きろお前ら！この先に艦娘がいるみたいだが、どうやらけがをしているみたいだ。  
早く行くぞぞ！」

「了解！」

「Sir, yes, sir！」

「Jawohl！」

うん、みんなわかってくれたのは嬉しいけど国を揃えようね

そうして全員で全力疾走すると、その船体が姿を現した。

「でけえ」

ぱつと見の感想はそれだった。

長い船体。その上には砲は無く、真つ平らな甲板が目立った。

なんだっけああいう船の事…ああそうだ空母だ。艦載機を乗せて指揮を執る艦。日本国旗が見える。

日本所属の艦艇なのだろう、綺麗な船だと思った。

ただ、よく見ると穴が開いていたり煙が出ていたりと損傷しているところが目に入った。

「めずらしいね、たいほうだよ」

「大砲？」

「ちやうわー」スパアアン!!

ふつうに痛い、てかどっから出したんだよそのハリセンは。

「むふー」

あ、ドヤ顔してるよ。そっちがその気ならこちらだって手はあるんだぞ？

「ほーら、こちよこちよこちよー！」

「あはははははは！やめてー！」

「そんなことしてるときなのかー？」（。？。？。？）じとー

おうやめーやその目は俺に効く。んじや早いとこ行きましよーかね。

く5分後く

船の真下に着いた。

近づくとつれてやはり損傷が目立ってくる。

「かいとー。こつちにかんむすいるよー」

妖精さんが艦橋の上で呼んでいる。てかどうやって上がるんだ？それ

「おーい、上上がりたいたいんだがー」

「まっつーいまはしごおろすー」

おー繩ばしごが降りてきた。

船の上へ上がると女性が倒れているの見える。

「お、おいそこの人無事か…」

「「くせものだであえであえー」」

「「つかまえろー」」

「うおっ！何だ！」

~~~~~

…ふむ。一瞬の出来事であつた。

今起こつたことを説明しよう

横たわる彼女に近づいたその時！エレベーターやら艦橋やらから大量の妖精さん達が出てくる！

そして俺を押し倒し！ガリバー旅行記よろしく雁字搦めにしやがったのだ！

恐らく出てきたのは大鳳に乗っていた妖精さん達だろう。

まあ知らない奴が船に勝手に乗ってきたらそりや警戒するわな。

だが、俺は決して聴き逃してはいない。

最初に呼びかけたのは俺と一緒に来ていた奴らだということをし！

「まんしんだめぜつたい」

「がいしゆういつしよくです」

「これがわたしたちのほんとうのちからです」

「ありがとう！身に染みたよ！ついでにお前ら暫く甘味抜きな。」

「「「ガ――」―1（0△0）1―1―1―1」」」

だいぶ堪えた様だ

「だけどさ？」

「はいい？」

「いや、そんな某特〇係の右〇さんみたいな返事しないでいいから。」

「すきなんですよ〇命係の〇京さん」

「さいですか、ところで甘味抜きでどうしてお前らまで反応してんだ？」

「のつたほうがいいとおもいました」

「ノリがいいついでにこの拘束という貰えませんか？」

「それはむりです（・ω・）」

わあ伊伊笑顔

え？自分で外せって？無理無理！だってコレワイヤーだもん

「じゃあ、ここに来るまでの経緯を話すからお前らが大丈夫と判断したら外してくんな

い？」

「んーそれならいいのです。はなしてみるのは」

少年説明中

「くくで今俺はここにいる訳だ」

ふう、疲れた

話し続けたら喉乾いたな

「海水ならあるよ」（？▽？） つ海水

「（いら）ないです」

「分かりました。貴方のことを信じます。」

「ん？いいの？そんな簡単に信じて」

「だいじょうぶです。われらはことばにあくいがあるかどうかくらいはわかるので」

まじかよ妖精さん凄いな

「そこのお前らのお姫様をベットか何かに寝かせたいんだけどこの拘束といってくれない？」

「りようかいです」

というわけで絶賛自由の身の俺

お姫様をお姫様抱っこして現在妖精さんの道案内で医務室に直行中です。

歩いてる間に何故こんな所に来たのか教えて貰えた

大鳳の所属していた所の提督はいわゆるブラックなのだそうだ。

駆逐艦は使い捨て同然に使われ、殴る蹴るも当たり前。

入渠もまともにせず、大破進軍もしよっちゅうだと言う

そんな中道中が厳しくて突破出来ない海域があったそうだ。

そこで声がかかったのが、大鳳だった

「装甲空母と着くならば道中の雑魚敵くらい余裕だろう！」

そう言つてその提督は大鳳を単艦出撃させたのだ。

ついた海域での戦いは戦いと呼べるものでは無かったそうだ



そして大破した大鳳はギリギリで逃げ切り、ここまで来た時点で気を失った  
……ふむ

／ そいつは俺のぶっ殺リストに追加だな

幸い医務室は無事だったので応急手当を施して寝かせた

呼吸もさつきまでの辛そうなものから大分落ち着いているので大丈夫だろう。

は？なんで治療の知識があるんだって？

家庭の事情で怪我するやつが多かったからいつの間覚えたんだよ

「ふー」

彼女が起きるまでまだ暫くかかるだろうしそれまで少し仮眠でもとるか。

起きたら損傷箇所の確認とか直せるかどうかの確認をしなければいけないなあ……

Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z

### 3話 高校生は艦娘「大鳳」と会話するようです。

目が覚めた時、時計はもう午後の7時を指していた。

自分が思っていたより疲れが溜まっていたらしい

かなりスッキリとした気分だ

「あ、あの娘目が覚めたのか」

隣のベッドは空になっていた

手を当ててみると大分冷えていた。随分前に起きていたようだ

「かいとおはよー」

「よくねてたねー」

「ねぼすけさんてすねー」

「きょうしゆくですうねがおいたいただきましたあ」

「おはよう、どこにカメラを持っていたか知らんが消しておけよ？」

「ぜんしよする」(やるとは言っていない)

なんか嫌な予感がする

具体的に言うとは後々大多数の人に恥ずかしい写真をばら蒔かれそうな

…まあそんなこと早々無いだろうし大丈夫だろう（フラグ）

「ところで大鳳さんがどこに行つたか知ってるか？」

「たいほうさん？」

「かんぱんじゃない？」

「もしくはしょくどうとかー？」

「そうか、じゃあ両方行つてみるか」

「「「りようかーい」」」

所変わつて食堂へ

食堂では妖精さん達が大量のお皿を洗っていた。

夕飯のあとだったんだろう。

そんな事を考えていたら皿洗いをしていた妖精さんが気づいたようだ

「あつめがさめたんですね、おはようございます。よるですけどね」

「おはようございます、勝手にベットを使つてしまひすみませんでし

た。」

どうやら俺が寝てた事は艦内全体に伝わっているようだ…恥ずかしい

「それぐらいもんだいなんです、むしろ応急手当までしていただきかんしゃしたいくらいです」

「そう言つて貰えると安心します。ところで、大鳳さんが何処に居るかってわかりますか？」

「かんちようですか？おそらくかんぱんに居るかと」

「ありがとうございます。行つてみますね」

「あいにいくならかんちようにこれをわたしてくれませんか？」

「そう言つて妖精は風呂敷に包まれたものを渡してきました。」

「おにぎりですよ。ゆうはんのお米ののこりでつくりました。みたかんじあなたもたべなさそうですしおふたがたでわけてたべてください」

「そう言われると急に腹が減るもので、お腹が音を立ててしまいました。」

「それを聞いた妖精さんはひとしきり笑つた後」

「つくつてよかつたです。あ、あとわれわれにけいごをむりしてつかうひつようはないですよ」

「そうですか…わかつた、ありがとうございます妖精さん」

「いえいえ」

「何だかこの船の妖精さん達とは仲良くなれそうな気がする。」

「甲板」

「甲板に上がると、大鳳さんは縁に座っていた」

「大鳳さん、身体の方は大丈夫ですか？」

「あなたは：助けてくれた方ですね！えっと：お名前は？」

「ああ天海海斗と言います。元氣それで何よりです」

「本当に助かりました。あの子達から聞きました。応急手当までして下さったそうで」

「俺の腕じゃ効果があるのかすら分かりませんけどね：

とところで食堂の妖精さんがおにぎりを握ってくれたんです。一緒に食べませんか？」

「ホントですか！丁度お腹が空いちやっつててどうしようかなって思ってた所だったんです。」

それから2人でおにぎりを食べた具材は梅干しと塩の二種類。どちらもとても美味しかった。

「ところで海斗さんはどうしてこんな島に居たんです？」

「あく簡単に言うると旅行先で事故って気付いたら20年後のこの島にいた。ok？」

「(((((( )))・∩・; )))」

あ、引いてらっしやる

「そんな顔されても俺だってわけがわからないんですが( ; ω ; )」

「そ、そうですね！でも原因はわかりますよ！」

「ホントですか！」

「ええ、それは深海棲艦の仕業です！」

なんかドヤ顔で言われた。まあ可愛いのでよし！

「それはどうしてわかるんですか？」

「何故なら深海棲艦がこの世界で1番のオカルトだからです。不思議なことがあつたら大体深海棲艦のせいですよ？」

「どんぐらいですか大体」

「9割5分程です」

ほぼ100%じゃないですかヤダー

「深海棲艦は何がしたいんですかね…」

「それがわからないんですよ。制海権は取られましたが全く船が外に出れないとかはないんですよ。と言つても武装を一切積んでない漁船とかに限りませうけどね。」

「ということは人類の殲滅が目的ではない？」

「陸に上がつて人を殺すうとする深海棲艦もいますけどね。さつき言つた漁船の話も何処でもある話とかではなく、ほんのひと握りなんですよ。」

「向こうも一枚岩じゃないつてことか、あちらさんと会話出来たら1番なんだがなあ」

「出来るわけないつて言いたいところなんです、貴方ならやつちやいそうですね」

「あつたらやつてみたいですが撃たれたら怖いですね」

「ですねー」溜りもありませんしね」

「あはははははは……」

(シヤレにならない)

「ゴホン！ところで、この船は直して日本へ戻るとは出来ますか？

「はい、うちの子と調べました。船体の損傷はありますが航行に問題はないです。飛行甲板は発着艦可能です。ただ、機関部が被弾したまま無理をさせたので現在稼働出来ません。後前方不注意で座礁したので自力航行が出来ないです。」

なるほど大分きついかな？これは救助を呼ぶべきか？

「あ、通信機器は真っ先に壊れたので使えません。」

「かいぞうしゅうりならば！」

「われわれにおまかせあれー」

「まかせろばりばりー」

うちの妖精たちがなんか言ってる。

「お前から出来るのか？聞いた感じ大分キツイが」

「「「ようせいどうとは！

まかいぞうすることとみつけたり！」」」

見事に揃ってんなあつてか修理じゃなくて魔改造かよ

「え？はい？」

見ろよ大鳳さんを、滅茶苦茶混乱してるじゃねえか

「たいほうさん！わたしたちに！やらせてください！」

「え？ああうんいいよ、原型は止めてね？」

「「「ヤタ——（。▽。）——！！「「「」

あーあOK出しちゃったよ。まあどんな感じになるのか楽しみではあるけど。



## 4話 高校生は妖精さんの暴走に絶句するようです

うちの妖精さん達が空母大鳳魔改造計画を開始してから1ヶ月が経った。

改造するにあたって大鳳さんのところの妖精も動員してようだがその妖精さん達が

「あんな技術どこで手に入れたんだよ」

とボヤいていた。一体どんな改造を施しているのか改造箇所が立ち入り禁止にされている上に箝口令も敷かれているらしく、大鳳さん本人でさえ知らないようだった

艦娘は船と繋がる事で船内の状況を把握出来るらしいが、

大鳳さん曰く、

「改造されてる所だけ霧がかかった様になって分からないです。」

との事。

俺？知ってるわけがない

俺は真夜中にボロボロの船が何隻も海の中から出てきた事なんて知らない。

いいね？：(。ω。)：ガクブル

因みに俺はこの1ヶ月間ただ遊んで暮らしたわけじゃない。

航空隊の妖精にレシプロ機の特徴とか戦闘機動とかを教えて貰ってた。

いや別に航空機飛ばしたことの無い初心者ってわけじゃないんだよ。

俺の爺ちゃんやんが飛行機を製造する会社の社長で重度なミリオタだから暇なヤツ集めて橘花とか震電とか紫電改とか作ってたからテストフライトの名目で乗ってただけ。

アメリカの製造工場の空を何度も飛んだりしてた。

(良い子も悪い子も真似しないでください)

だから普通に飛ばすだけなら簡単だ。

朝起きて島をぐるっとランニングして朝ごはん食べて訓練やって昼ごはん食べて訓練して座学やって、夕飯食べて死んだように眠る。

これの繰り返し。

訓練つけて下さいなんて気軽に言うもんじゃ無かったと思っただが、初めて妖精相手に勝てた時には今までにない喜びを感じることが出来た。

今では航空妖精と演習をして3回に1回は勝てるぐらいには成長した。

そして今ではもはや日課になった朝のランニングの後、とうとうそいつは俺の所へやって来た。

「かいとーかいぞうおわったよー」

「「「いえーい!!」」」

そう、1か月前に魔改造宣言をしたあの妖精達だ。

今大鳳の船体は工事用の足場だらけではあるが、パツと見変わった感じはしなかった。

まあ、軍艦に関しては俺はド素人だし、後でこいつらの説明を聞けばいいか。

「ではさっそくたいほうさんといっしょにごあんないを」

「いやいやまずは朝御飯を食べてからだ。腹が減って仕方がない、

ほら、お前らも行くぞ」

「「「はーい……」」」

おーおー目に見えて落胆しておる。そんなに急いで見せたかったのか。だがこれは譲れないのだ。

1日3食食べてしつかり寝ること、あと適度な休憩。これだけは必ず守るようにしている。

そうしないと体が持たないというのもあるが、一番の理由は大鳳さんだ。訓練を初めて最初の頃、飛ぶことに熱中し過ぎて昼飯の時間を過ぎてしまった時があった。

その事を妖精から聞いた大鳳さんがあるう事か艦載機に自分で乗って模擬空戦していた俺と妖精さんを撃墜判定にしたんだ。着陸した俺に、大鳳さんは

「無茶して墜落でもしたら訓練の意味がないです！ちゃんとして休んでご飯を食べてください！休んで頂けないのであれば叩き落としてでも休ませます！」と言った。実際その技術の高さを見ているので出来るわけないとは言えず「わかった」と伝えた。

それからというものの、飯の時は大鳳さんの向かいの席で食べている。

なんでそこなのかって？そこに座って欲しいって言われたからだよ？

まあ悪い気はしない。大鳳さんは普通に美人だし、むしろ役得って感じ？

あれ？なんかみんなの視線が俺に向いてる。なんでだ？大鳳さんの顔が赤くなってる。え？まさか

「…俺、どこから声に漏れてました？」

「えと…その…悪い気はしないってところからです／＼／＼」

よりにもよって一番恥ずかしいところで聞かれてしまった、滅茶苦茶頬が熱い、妖精さん達はニヤニヤと笑っている

結局その場の空気に耐えれなくなった俺はご飯をかきこみ、

「お前ら、俺と大鳳さんに改造箇所のご案内をたのむ！」

全力で逃げることにした

機関室前の廊下

妖精さんにここに集合と言われたので来たがまだ誰もいなかった

「一番乗りか」

「では私は2番ですね」

「俺も今来ましたし、ほぼ同着のような物ですよ。それより先程は本当にすみませんでした。」

「いえ、あの大丈夫です、あなたに言われて嬉しかったですし…」

「ん？何か言いました？聞き取れなかったのですが」

「い、いえなんでもないです！ホントに／＼／」

「あおはるですね〜」

「たいほうさんかおまつかw」

「もしかしてもうつきあつてたり〜？」

「「ありえるー！！」」

「おいお前らそこにいるの丸わかりだぞ来てるなら早く案内してくれ、

それと俺と大鳳さんはそんな関係じゃないから」

「「はー、」」

「そうですね、私達は所詮その程度ですよね…」

隣で大鳳さんがショックを受けてた。何故だろうか、わからん

<ここから妖精さんも漢字で喋ります。読みずら過ぎたので>

「ごほんーそれではせつめいをはじめます。今回は機関部が一番被害が大きかったのでエンジンを変えました。正確に言えば暇つぶしに鋼材いじってたら出来ちゃった重力子エンジンに」

「」

2人揃って絶句した。尚説明は続く模様

「このエンジンは単体ではそこまでの出力はありません。しかし、同時に稼働させることで膨大なエネルギーを生み出します。なので海底に沈んでいた船を解体して大量生産しました。」

因みにこの船には計360基搭載しています。予備も含めればもつとありますが、これにより最高80ktは出せる計算です。」

「アホだこいつら」

「(。？。ゴフツ」ボタン

「推進部の出力を変える事で曲がることも出来ませんが、スラスターを稼働させることでかなり小周りが効きます、また、前方に向けて噴射出来るのでこれで座礁した問題は解決かと」

確かに解決はしたが別の問題がある気がする

「これで機関部は以上ですね。次に兵装の説明に入ります。」  
まだあるのか

「エンジンの積みすぎでどんなに無茶な機動してもエネルギーが有り余るので、そのエネルギーを船体を砲身として打ち出せるように改造しました。あと、ミラーリングシステムも搭載しました。これはこちらに対する攻撃を空間に干渉して無効化するシステムです。」

後副兵装として203mm三連装荷電粒子砲を4基搭載しています。

後はミサイルなり対潜音響兵器、対空用のパルスレーザーを追加しています。

これで以上ですね、ご清聴ありがとうございました。」

そう締めて妖精さんはペコリとお辞儀をした

や、やっと終わったか。予想以上に変わっていたというかもはやこれは現代で作れるようなものなのか？

あれ？隣で聞いてたはずの大鳳さんが見えない、と思つたら足元にぐにとした感触があった。

「ああ、耐えられなかったのか。」

大鳳さんは吐血して床に倒れていた。

恐らく自分の許容量を超えた改造に理解が追いつかなかったのだろう。

「…部屋に運んでおくか」

そうして、大鳳さんの気絶リタイアにより、ハチャメチャな説明会は幕を閉じたのだった。



5話 高校生は出発前夜に2度目の説明を受けるそうです。

改装が終わってから出発までは早かった

訓練のために簡易的に作っていた飛行場から格納庫へ艦載機を戻し、  
うなされていた大鳳さんを介抱して、

乗組員全員でうちの妖精が作った釣竿を持って釣りまくった魚を、

これまた妖精さん製の冷凍庫に全て保存。

起きてから聞けていなかった部分の説明を聞いてまた倒れた大鳳さんを部屋に運び

…大鳳さん大丈夫か？

…とまあ色々あつて、今はもう荷物は全部運び終え、出発までの空いた時間をのんびりと過ごしていた。

だがそんな時間は長くは続かない。

《あーあー、海斗さんこちら大鳳です。あなたの所の妖精さん達がまだ話していない事があつたそうなので至急艦橋まで来てください。》

「…ふむ。あいつらは後どれだけ俺の胃にダメージを与えれば気がすむのだろう。」

だが呼ばれてしまった物は仕方がない。

〜10分後〜

「天海海斗ただ今到着しました〜」

「海斗さん、いきなりお呼びしてすみませんでした。」

「いえいえ、うちの問題児達の話ですから。んで？お前らは今度は何で俺にダメージを与えるんだ？」

『ダメージとは失礼な』

『われわれはぜんりよくで期待に応えようとしただけ』

そこが問題なんだよ程度を知れ

『まあ、そんな話は置いといて本題に入るよ〜』

『この前空間に干渉して無効化するミラーリングシステムを搭載してるとい話はしましたが、ぶっちゃけた話あれすごく燃費が悪いです。なのでその簡易版として船体の表面にエネルギーを吸収するフィールドを発生させられます。』

砲弾の運動エネルギーとかも吸収出来ちゃいます。ですが無限には使えません。臨海に達したらそれ以上の展開は出来ません。

溜め込んだエネルギーを使うか、放出することによって、再度展開できます。そして起動時には有り余るエネルギーが船体に走って模様ようになります。これがとても

綺麗に光るので滅茶苦茶目立ちます。まあ、ここまでガチガチに固めたら見つかったも問題ない気がしますが、これが伝えてなかった話の1つです」

「読むのが面倒くさくなつた読者さん、要はあれだ。アルペジオのクラインフィールドだ。あれの若干独自解釈混ぜた感じ」

読者さんってなんだメタいぞ

『かいとー何故虚空に向かつて話してるのか知らないけど次の方も大切だからちゃんと聞いてね』

「あいよ」

「続けてください」

「あれ？大鳳さん倒れなくなりましたね」

「はい！やたら技術力が高いですが悪い子達では無いということは分かったのでもうどうでもなあれと思うことで解決しました！」

なるほど、確かに悪事には使いそうにはないがイタズラはしそう。

…黙っておこう

『ゴホン！では次に移りますよ。ここまで改造の結果を伝えてましたが勿論それによる制御の負担も大きくなります。てか大鳳さん1人だと脳が耐えられないレベルになりました。というわけで無茶して1人で動かさないように1人では外せないセーフティ

を掛けております。』

「アホやん」

動かせない船作ってどうすんのさ』

『そう思っている貴方!』

やめろ心を読むんじゃない

『耐えられないほど負担を大きくするのは申し訳ない。そう思いました!しかしわれわれは思う存分改造出来るという誘惑に勝てませんでした』

「いやその誘惑に勝ってくれよ」

『そして気づいたのです。1人でダメなら二人いればいいと』

「はいい?」

いけない二人揃って右〇さんになってしまった

「いや艦娘は大鳳さん1人しか居ないじゃん」

『無いのなら作ってしまえホトトギス』

そんな暴論通ってたまるか

『艦娘はドロップ、建造、ほかの所からの移籍で入手できると説明しましたがーじつはまだあるんです。それが適合です。』

「適合?まさか!」

『察しがいいですねー、その通りです。人に艦娘プログラムを流し、艦装との繋がりを持たせる。それが適合です。』

ああ妖精さんが凄<sup>マジ</sup>キチスマイル<sup>キチスマイル</sup>してて…

『プログラムは夜寝てる間に流しちやいました。夕飯に睡眠薬を盛ったのでぐっすりでしたね』

「つまるところ俺を艦娘へ大鳳の補助として使うつもりだったんだな？」

『そのつもりだったんですけど、かいとは想像より遥かに適合率が高かったんです。それこそ一人で艦装を運用できるレベルで、

今のあなたは艦娘と同じ、男性の艦娘だから艦息かな？しかも空母型でした。』

「大鳳さんと同じだな」

「そうですね、ちよつと…いえ大分嬉しいです」

なんか聞こえたがきつと気の所為だろう

『まあ艦名まではわからないし艦装もここでは作れません。そういうのは日本につけてからですね』

「そうか、気付かないうちに人体実験されてたショックが大きくて忘れてたけどこれで二人同時操作の条件はクリアしたのか。」

「そういえばそうでしたね、ですが海斗さんはいいんですか？いきなり肉体に改造施し

「ちゃった？テヘペロ？（？>？<？）って言われたんですよ」

「ん？ああまあ、なつちまったもんは仕方ないしそこら辺は割り切るしかないだろう。ぶつちやけた話、体に変化してる感じは前々からしてたんだ」

数日前まで耐えられなかった高負荷起動が急に出来るようになったりとか  
『艦娘となったことで身体が丈夫になっただけじゃなくて身体能力も上がってますよー』

だからお前らは人の考えていることを読むんじやない

『それではご理解頂けたということだ』

「まあいいだろう。これからはちゃんと相談してからにしてくれ」

「海斗さんがいいなら」

『ならば今日はもう日か沈んでるし明日出航しましょう』

外を見ると確かに当たりが暗くなっていた。

「そうしましょうか、ところでこの船の艦長は私ですよ？そこは譲れません！」

「そうだぞお前らー艦長命令は絶対だからなー」

『はい』全員

「それでは明日の7時にまたここに来てくれませんか？」

「りようかいです。おやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい」

『ラブラブだねー』

『二人一緒に寝ないのー？』

「寝ない！」「寝ません！」

## 6話 高校生は出航するようです

俺は目覚ましが無くても何時も6時に目が覚める。

少しでも遅れてしまえば親父が蹴り上げからの流れるような投げ技までがデフォで付いてくる。

その習慣はこちらに来てからも変わらなかつたようだ。

現在俺は航空隊妖精達が過ごしている場所の近くの部屋で寝起きしている。

手早く布団をたたみ、共用の水道で顔を洗う。何時もならばこの後着替えて走ってから朝御飯を食べるのだが、今日は7時に集合なので寝巻きから着替えて直接食堂に向かう。

因みに寝巻きや替えの服はリュックの中に入ってた。リュックが無かつたらなんて悲惨すぎて考えたくもない。

食堂につくと既に多くの妖精さん達が朝御飯を食べていた。

『おう海斗！今日のはやいな！走らなかつたのか？』

「今日の出発の日ですから、大鳳さんと一緒に7時に集合なんですよ」

『そうだったな！初めての共同作業頑張れよ！ガハハ』



「かつからかわないで下さい、そんなんじゃないですから／＼」  
『いつかは我らも天海ファミリーの傘下に入りますかな?』

航空隊の妖精は俺を海斗と呼び捨てて呼ぶ。

そしてからかう。ことある事に。

俺が艦娘になつて居る事は全員知つて居るようだ。

普通ならば男性が艦娘プログラムに適合する事は方に1つも有り得ないそうだが、あそこまで高い技術力を持つて居るのなら天海ファミリーは不可能も可能にするだろうということ満場一致したようだ。

天海ファミリーとはうちの妖精4人組の通称らしい。

いつの間にか広まった様だが本人達は偉く気に入つて居るとのこと。∴お前らはマフィアにでもなるつもりか?

後

「それだと俺が一番ヤバイやつみたいじゃないか?」

『戦闘機の飛ばし方を知つてるとはいえ、訓練を始めたばかりのひよつこが我ら航空兵に勝てるのが普通とは言いませんよね?』

「知らんな(すつとぼけ)」

自己流で勝てなくとも見て真似ることならそこまで難しくはない

そうクラスメイトに言った時はえらくゲンナリとした顔をされた。解せぬ。

そんなことを思ってたらいつの間にか厨房の前までついていたようだ

『海斗さんおはようございます今日はアジの干物がありますが如何ですか?』

「頂きます」

最近魚料理が多い気がする。まあ仕方ないと言えば仕方ないのだが。

原因は間違いなくこの前配られていたうちの妖精印の釣竿だろう。

試しに使って見たら着水と同時に引つ張られる感触があり、数分もしないうちに魚が釣れた。

試しにルアーがまるで魚に向かって進んでいるみたいだね。と、恐らく犯人であろう4人組に言ってみたら揃って目を背けやがった。

最早アイツらに変なものを作るのは日常となっている。

いつも通り美味しいご飯を食べたら6時45分だった。

ササツと皿を洗い、食堂を出る。

6時55分

艦橋につくと既に大鳳さんも妖精達もいた。

「大鳳さんおはようございます」

「おはようございます海斗さん、よく眠れましたか？」

「はい、ぐっすりと眠れました。船の操作はぶつつけ本番ですが頑張りますよ！」

『かいとー私たちにおはようのチューはないのー？』

「あん？まだ寝ぼけてんならデコピンして海に投げ込んでやるぞ？」

『め、目が覚めました！ボス！』

「こんなのはまだ日常の範疇だ。」

「この前なんか白いワンボックスバンに乗って黒塗りの高級車に突っ込んだりしてた。意味わからん」

「目が覚めたなら操作の仕方を教えてくれ。」

「よろしくお願いしますね」

『ゴホン、では同調のやり方からですかね。まず手を繋いで下さい』

「は？」

「ふえ？」

「成程そうまでして殴られたいのか」

『まってまって巫山戯てないから！とりあえず話を最後まで聞いてください』

「まあいいだろう」

『この2人で操作するというのはまずお互いがお互いを艦装として認識するところから始

まるんです。

艦を動かした時の足りない分を、もう1人に渡す。これをお互いでやる事で均衡を保つ。という仕組みになっています。

その認証の一番楽な方法が接触なんですよ。数をこなせば同調出来る距離は広がりますがね。あ、それとも手つなぎでは足りないかと？

別にキスでもハグでもいいんですよ？w』

「そそそそんなハレンチな／＼／＼」

大鳳さんが顔真っ赤になってる。かく言う俺も頬が熱くなっているのが自分でもわかる

「手を繋いでも…いいですか？」

「は、はい！喜んで！」

初めて異性の人と手を繋いだ気がする。

ん？なんか流れてくる、これは大鳳さんの記憶？あれこれ見ていいやつ？

ヤバいめっちゃ緊張する。

『そんなにガチガチだと出来ることも出来ないよ？。』

「そ、そうですこれからも何度も繋ぐんですから一緒に慣れていきましょ？。ね？。」

ふー少し落ち着いた

『次に移ります。エンジンを起動させてみましょう。大鳳さんはいつも通りの感覚でいいです。かいはー機関室の状態はわかりますか?』

「ああ、不思議な感じだよ、そこにいないのに触れる感じがする」

『それでいいです。そこにある出っ張った部分を回して押し込む感じで行ってください。』

「ん?こうか?」

『重力子エンジンの起動命令を受信。これより最終負荷テストを開始します。∴終了まで5∴4∴3∴2∴1∴終了しました。エンジンの正常起動、完了しました。最低出力にて待機します』

「この声は一体なんですか?聞こえると言うよりかは頭の中に直接響いている感じですよ」

大鳳さんが言った通りだ。俺も同じように感じた

『エンジンが正しく稼働してるかどうか調べられないと思ったのである程度は自律して問題を探すプログラムを組んであります。』

「出来ないと断言されるのは癪に障るが、正直助かった」

「ですね」

『これで船にエネルギーが行き渡るのでパターンが浮き上がっていると違いますよ』  
「そうなのか？」

気になったので外に出てみたら確かに光ってる。基本的には前から後ろへ流れている感じで光っていた。中でも印象的なのは艦橋だ。

円の中に鳳凰をイメージしたのであろう模様が浮かび上がっていた。

中々に綺麗だ。

『では次は役割の方を分担していきましよう。と言つても担当してもしなくてもお互いが協力して1つの情報を処理してるのであまり深く考える必要は無いです。』

「じゃあおれは兵装の制御を」

「では私は航行の制御を担当します」

『了解です、今選択した情報が優先して送られるようにしておきます。』

『設定完了しました。これで艦を動かすことが出来ますお疲れ様でした』

因みにずっと俺らは手を繋いだままだ。先程手を離してみたがかなり酷い頭痛に襲われた。それは大鳳さんも同じだったようで大人しく手を繋いでいる。

「それでは動かしてみます」

《全システム稼働。補助演算装置の展開を開始します》

その言葉の直後、俺らの周りに蒼いリングが形成された。

そのリングに大鳳さんは少し驚いていたが、直ぐに落ち着きを取り戻してスラストを動かし、座礁した状態から脱した。

座礁したなら艦艇に穴が空いてると思ったのだが、海底は完全な砂地で乗り上げて動けなくなったところでエンジンが止まったらしい

「凄いですよこれ。感覚で動かせるので以前より遥かに動かしやすいです！」

『以前より遥かに強く船と結びついているからでしょう。人が歩く時に重心の事を考える事がないのと同じですよ』

よく分からないが要はもつと簡単に動かせるということらしい

大鳳さんは大分テンションが上がっているようで操縦に夢中になっていた。

既に艦首は沖に向いている。

「沖まで15knotで航行しそれから40knotまで速度を上げて日本へ向かいます！」

「了解」

出航となると汽笛を鳴らしたくなるな。そういやこの船に汽笛って鳴らせるのか？

WOWsだとNキーだったけど。

「ボオオオオオー!!」

鳴っちゃった。あ、妖精達が凄いジト目でこちらを見てる

『確かにイメージで動かせるとは言ったけど、その素がゲームなのはチョット…』  
仕方ないだろ。鳴るとは思わなかったんだから



## 7話 高校生は初戦で暴れるようです。

出航してから1時間が経った

先程偵察に出た偵察機からはまだ敵艦発見の報せは無い。

現在40ノットのまま、島を迂回しつつもほぼ一直線に日本へ向かっている。

本来ならば人のいる島に寄り、補給をしながら進まなくてはならないのだろうが、エンジンが燃料を必要としなくなり残っていたものを

妖精の謎技術で航空機に使えるようになったため補給する必要がなかった。

そんなわけで特にすることも無く俺らは武装の確認をしていた。

説明は受けたがどれがどの場所にあるか等知らないこともあったからな。

今の体になった事を自覚してから、俺も大鳳さんも空中に情報を投影出来るようになった。これで艦の全体図を見ていた。

「ホントにこれ便利だな仕組みわからないけど」

「ほんとですわね何処でも使えますし。原理が分かりませんが」

「うわあ対空機銃全部パルスレーザーに置き換えられてるぞ」

「え?でも見た目は変わってない…」

「ほらここ機銃座にエネルギーの導管が流れてるだろ？」

「あ、ホントですね機銃の方に流れてる。てつきり方向を変える補助用だと思ってました」

「最初は俺もそう思った。そこでこつち、甲板なんだけど正方形が左右2列に80個ずつ並んでるんだけどこれは何だろね？」

「横から見れば長方形に見えますね。もしかしてミサイルとかじゃないですか？」

「マジで？ああ、大鳳さんの予想的中だよ、これもう訳わかんねえな」

「まだありますよ」

「何だと？」

「右舷と左舷に10基ずつ、魚雷発射管があります。因みに打ち出すのは誘導性を持った魚雷だそうです」

「魚雷？」（。？。？。）

「ハイ魚雷です」（。ω。；）

「それも違う気がする…ああこれとかもう使い道がわからん」

「どれです？」

「これ。舷側に2基ずつついている203mm3連装荷電粒子砲」

（。ロ。ポカーン…

ハア——（ロー）——ア：

「仰角分しか狙えないじゃん！」

「きつと何か使い道があるんですよ」

「だといいんだけどなあ」

空母に載せていい武装ではないという結論に至ったところで偵察機から無線が来た  
へこちら一番機敵の偵察機を発見。付近に機動部隊がいる模様。

艦が発見される可能性あり、撃墜の許可を求む。

お、やっと来たか。武装を試してみたいな（つ・ω・こ）ウズウズ

「武装を試したくてウズウズしてるのはわかってますよ？」

あ、バレてら。ある程度の思考はリンクしてるのね、まあいいけど

「じゃあこちらに引き寄せてもいいいか？」

「まあ、いいでしょう私とて気になってましたし」

押し、了承も取れた

「えーこちら海斗。撃墜の要無し。敢えて場所を知らせて誘き寄せる。貴官らは敵艦載機の位置情報を大鳳へ転送後艦隊の発見に努めよ」

へは？海斗正気か？帰ろうとしたら沈んでましたとか嫌だぞ

「問題ないぞ？アホみたいにミサイル積んでることが判明したから」

〈ミサイル!? わかったくれぐれもお嬢を死なせるようなことはしないでくれ〉

「任せろ。家族の顔を見るまでは俺は死ねないんだ」

〈……………〉

「あ、切れた」

大鳳さんの方を見ると何となく言いたいことがわかった

それは死亡フラグですよ、と

お、位置情報が送られてきた、現在地はーうん余裕でレーダーで追える。というか600km先まで正確に補足できるから楽勝ではある。

うーん敵機は全部で4機。まあ偵察ならそんなものか、時間で見れば後30分程だ。

敵がこちらを発見するまで大分かかりそうなので先にミサイルの装填を始めておく。

生憎この船にはイージスシステムはないが、俺と大鳳さんの2人で同じことが出来たりする。というわけで

「イージスシステム(笑) 起動。ターゲットENEMY1番から4番、ミサイルランチャー1番から12番までSM-2MRを装填、攻撃命令が出るまでは待機。」

ぶっちゃけ声に出さなくても操作できるのだがこちらの方がテンションが上がる。

後はお茶でも飲んで来るのを待つだけ…

「海斗さん…」

「ん？どうした？」

「ミサイルランチャーの所を見てたのですが、何も無いところから湧き出てきました」

「…やめようこの話は。きつと考えたら負けだ」

「ですね…私これの利点を見つけちゃいました」

「どんな？」

「湧き出てきてからミサイルの発射準備が完了するまで5秒かからなかったんです。だから沢山連射出来ますよー」

「なるほどじゃあ相手の数が多かった時にでもやつてみるか！」

く20分後く

お、この距離なら視認できるかな？

おーいたいたさすがにこちらも見えてるだろうなあ

「向こうから見ればこちらは護衛もなんもつけてない空母1隻ですから立派な餌ですよ」

「実際は艦種の域を超えた重武装なハリネズミだけだな」

「そうですね」

「はやく敵来ないかなあーあ、方向変えたでも逃げ帰ると言うよりかはつかず離れずの

ままってとこか」

「敵さんもこんな美味しい餌を逃がしたくないでしょう。機銃が届かなければ安全だと思ってるんですかねー?」

「まあ相手もミサイルが飛んでくるとは思わないだろ加護が無ければ現代兵器は効かないんだから」

「まあ遠目に見たらなんか光ってる気がするーでだけで終わりそう」

「敵さんがどんな顔してきるかがちよつと楽しみです」

「じゃあやりますかー対空ミサイル1番から12番目標変わらず、発射開始」

ガコガコガコガコ!!

こういう順番に開いていくのやっぱいいなあ!

ブーツツシュユューー

おー飛んでった、あつという間に上空に

「慌ててるのが手に取るように分かるぞ?」

「慌てて散開しましたけど戻っちゃいましたね。効かないと鷹を括ってるんでしょう」

「避けないのなら当てるのが楽でいい」

着弾まで…:後10秒…:5…:4…:3…:2…:1…:

「全機撃墜」

「12発も要らなかつたですね」

「だなー」

「こちら一番機そろそろそつちに敵機が着く頃だと思ふんだが」

「大丈夫だ問題ない、こちらを確認させた後に撃墜した」

「マジでやったのかよ…まあいい敵艦隊発見。」

「規模はどのくらいだ？」

「空母2 戦艦1 軽巡1 駆逐2だ。位置情報を送る、あ！敵が進路変更した！お前らの方に向かっているぞー」

「感謝する、諸君らは発見されないよう現空域を離脱、間違つても敵艦に突撃して落とされましたとか許さねえからな？」

「当たり前だ俺はな海斗オ、帰って酒飲むまでは死なねえって決めてんだよオ！」

「おいそれ死亡フラグ」

…切れてやがる

「これがフラグ立てられた側の気持ちですよ」

「済まない、身に染みたよ」

すげー不安だ

おー感知出来た…これは

「真っ直ぐ突き進んでますねこちらに」

「いやまあ確かにね？近づいても艦載機を飛ばしてこない空母とか追いかけたくなりそうなものだけだよ？」

もうちよつと警戒したらどうだい？

「今大体14km程離れていますね」

「荷電粒子砲の射程だな、だが砲を向けられるのか？」

「それなんですけどちよつと見ててください」

ん？大鳳さんが手のひらを返しながら腕を振った

3連装砲の方で稼働音がして…

「あー」

伸びてた、アームが。船体との接続面からアームが伸びてめっちゃヌルヌル動いてる、ほんとなんでもアリか

「だがこれで狙うことが出来る」

艦載機を飛ばされるとめんどくさいから空母から狙う

「荷電粒子砲 左舷一斉射！」

着弾今！空母1隻戦艦1隻撃沈空母小破

一瞬で距離をゼロにしやがった。おっそろしい事にぶつかった所は消し飛んでやが



る。

「この威力はヤバいですね」

「味方に誤射しないようにしなきゃ（　・　・　・　）ガクブル」

やっちまった日が来ようものなら人生が終わる！

「まあ今は味方なんていないから気にせず撃つか」

「そうですね」

おつ大鳳さん楽しそう、スカッとしたのかな？

残った空母が艦載機を出してきたな。

全部で60強か

「対空戦闘よーい！」

全機銃を敵艦載機に向ける

「撃ちかたー始め！」

おおうまるで絨毯の様だ

発射レートが高すぎて切れ目が見えねえ

「ふはは、見ろ！敵機がゴミのようだ！」

あつという間に敵機は見えなくなつた。

向こうもさぞ焦っているだろう。

ただの空母だと油断してたら味方が溶けて航空機が全滅とか俺だったら発狂待ったナシ、うん間違いない。

「うわあ見事なまでに汚く喰い散らかしましたね〜」

大鳳さん!?!あなた割りりと辛辣ですね!

「ゴホン!俺実はトリガーハッピーなフレンズなんだけども思いつきりやつていい?」

「それ自分で言いますか?まあいいです殺つちやつてください」

許可が出たので大盤振る舞いしマース

「ミサイルランチャー1番から240番までハープーン装填!」

「あと残りはナパーム弾頭に切り替えて装填!」

ガシヤンガシヤンと音を立てて発射口が開いていく。

color:#fff0000「Go ahead, make my day.」  
lor

同時に発射させる、カッコつけるのも忘れない

なんとなく映画で聞いたセリフを言ってみたがなかなか良い。これから大事な戦いの時はこれをいうことにしよう。

空中に飛び上がったミサイルは一斉に敵へ群がっていく。ナパームは後からより広範囲を燃やせるように調節する。

そして着弾。

何百発ものミサイルの直撃を受け、さらにナパームによる焼却を受けた彼らが無事で済むわけがなく、そこには何も残らなかつた。

「フウースツキリした」

「確実にオーバーキルだと思えますよ？」

へ…海斗スツキリしてるところ申し訳ないが、着艦したいから発射した後の後始末を頼む

すっかり忘れてた。今の船は砲塔がアームで支えられ、ミサイルランチャーが全部で開いたままなのだ

「悪い、今片付ける」

「使用を控えないと空母が空母として働けなくなる気がします…」

「そこら辺は要相談だな」

とりあえずミサイルは辞めなきやなーと考えつつ、俺は武装をしまい始めた。

## 8話 高校生は妖精達を扇動するようです。

初戦から数日がたった。

あれから何回か深海棲艦との戦闘は起こっていた

駆逐と軽巡の水雷戦隊だったり、

潜水艦が群狼作戦をとってきたり、

ましてや戦艦6隻が射程ギリギリからの砲撃をカマしてきたり、

ホントに多種多様だった。そのおかげもあってか、大鳳さんと俺は少しなら手を離したまま、数分間ならば戦闘行動をとる事が出来るようになった。ただ進ませるだけならばもう少し長くなるが。

因みに俺からの頼みでうちの妖精に自動航行システムを作ってもらった。あらかじめ指定した座標までの最適なルートを検出して進んでくれる。戦闘行動は出来ないが、それでもその間は俺と大鳳さんは離れる事が出来るので助かる。

い、いや大鳳さんと近づきたくないってわけじゃないんだけどさ？

着替えとかどうすんのさ？

え、寝る時？一緒に寝てるけど？

夜襲われたら艦載機出せないんだから俺達と一緒に居ないと抵抗出来なくて終わるじゃん？何かおかしいとこある？

昨日の夜なんて潜水艦が何十隻も接近してたんだよ？危ないじゃん

つまり俺達はなんも間違つてない。証明終了

ところで話題を変えるけど、

どうして今虚空に話しかけてるんだと思う？

正解は…

航空妖精の方々の直談判を正座で聞いているからでした〜！

因みに大鳳さんも同じくです

始まりは今日の朝食堂に来たところから始まる。

「あく眠い〜」

「昨夜は大変でしたねー」

「ホントだよあいつら味方の残骸盾にしてしごとく耐えやがるもんだから、えらく時間がかかっちゃった」

ミサイルは勝手にホーミングしてくれるようにしたから楽だが、魚雷はそうはいかな

い。

誘導できるものを魚雷と呼んでいいのかわからないが、今考えることじゃないのでか  
そのまま呼ぶ。

魚雷は誘導ができるだけで勝手に狙ってくれるわけじゃない。

水中版ファン〇ルみたいなものだ。複数を同時に動かすと複数の視点を見ながら処  
理していく感じで、これがすごく酔うのだ。

そんな物を何十本も使っていたので予想以上に疲れたのだった。

「まあ、索敵の方は私が変わっておくので海斗さんは朝ごはん食べたらもう少し眠った  
らどうですか？」

「大鳳さんだって同じぐらい起きてたんだから悪いよ」

「そうは言っても私はたまにくぐり抜けてくる魚雷の処理ぐらいしかしてませんし、大  
丈夫ですよ」

「ありがとう、正直とても助かる」

大鳳さんマジ天使。略してTMT：なんか爆弾みたいになったな

てか、身体が強くなってもそこら辺は変わらないか

食堂に入ると、何やら妖精達が騒いでいた。

『我らに戦闘の自由をー！』

『『『『『そうだそうだー！』』』』』

何やら物騒なことを言ってる。

「おいお前らなんの話をしてるん：Σ（っ。D。；）っヒッ」

怖かったマジでビビった

あいつら一斉にユラアって動いてこっち見たんだよ、恐怖じゃん！

隣の手を繋いだままの大鳳さんから恐怖してるのが感じ取れる。

俺もだよ！お宅の妖精さんたち何か変だよ！

『カイトオいい所に来たちよつとそこに座れ。』

「ハイ、ワカリマシタ」

うん絶対に逆らっちゃいけない気がした。思わず正座してしまう程に

完全に理解した。逆らったら無言で海にポイされる：（；；。；ω。；）：

大鳳さんまでも隣で正座してる

『俺らがOHANASSIしたいことは他でもねえ、戦闘のことだ。』

あ、艦長まで正座させてることに触れないでいくのね

そして現在に至る。

あれから1時間は立っている。まだ話すのかな？

気を抜いたらすぐに寝そうだし足痺れて痛いし、

大鳳さんなんかフラフラしてきてるじゃん大丈夫か？

「寄りかかっっておくか？」

「すいません少しお願いします」

それでも彼らの話は止まらない

『まずあなた方はこの船の艦種を覚えてるんですか!？』

「空母だろ？」

『その通りだ海斗！空母！つまり航空母艦なんですよ！航空隊の母艦！それがこの船なんです！それなのに中航してからというものの戦闘が起こっても我らは出撃したことがない！ありえないですよ？』

「あーまとめると？」

『『海斗ばかり戦闘して羨ましい!!我々にも戦う機会が欲しい!すぐにでも!!』』

そうか…てか、戦っている事が羨ましいとかお前らは揃って戦闘狂かな？

まあそれなら確実な解決方法があるから楽ではあるが、

ん？少し離れたところに深海棲艦がいるなあ…あ(？)ω(？)…

「大鳳さん、今来てる敵さんこいつらに任せてもいい？」ヒソヒソ





斗のライフは0だ！

「大丈夫だろ…多分」

自分で煽っておいて不安になってきたどうしよう、

空母「大鳳」艦載機

流星

30機

彗星一二型甲

24機

烈風

24機

彩雲

8機

『オラア発動機まわせえ！モタモタすんな！』

現在甲板上では発艦作業が急ピッチで進められていた。

「初めて見るけど壮観だな」

エレベーターが上下する度、鋼鉄ノ鳥が大空へ飛び立っていく

「綺麗な編隊飛行だなあ」

「うちの妖精さんは腕が良いって他の鎮守府にも

言われたんですよ！」

大鳳さんが嬉しそうだ。自分の家族とも呼べる妖精達を褒められるのは嬉しいよう  
だ

無線から隊長の妖精からの指示が聞こえる

《おし、まず艦戦隊！制空権を取った後、50m機関砲による対艦攻撃を開始せよ！》

《了解！！》

「」

はい？50m機関砲？烈風に載せる装備じゃないだろ。どれだけフラストレー

ション溜まってんだよ！

《続いて艦爆隊！艦戦隊が切り開いた所より突撃！》

《了解！！》

《艦攻隊！お前らの装備は天海ファミリー特性のヤバイヤツだ！誘爆なんてしたら周りを確実に巻き込むから気を付けろ！》

《何てものを載せやがったんだ！》

全くその通りである。50m機関砲とか翼もげても知らんぞ？

それにしても天海ファミリーヤバいっていうのは確定してんのか



## 9話 隊長は姫相手に挑むそうです

俺は隊長だ。元は艦戦隊の隊長だったのだが、気付いたらほかの隊の奴までそう呼ぶようになった。

俺達航空隊は現在敵艦隊に向けて急行中である。

何故なら、偉大なる海斗様の有り難きお言葉（一部過剰表現あり）により、出撃が許されたからだ！

自ら戦うことも無くただ倒されていく敵を眺めるばかりでストレスが溜まっていた我々のテンションは、お祭り騒ぎといえるまで上がっていた。

『しっかしこの武装はえげつないなあ』

翼下に新しくつけられた50mm機関砲二門の事を考えひとりごちる。

あれは艦戦隊の大部屋でどうやってたら自分等が出撃する価値があると思わせられるかを話していた時の事だった

『えーこれよりどうやってたら出撃できるかを話し合っていこうと思う。』

『『『わー！！！！』』』』

『では各々の意見を聞かせてくれ』

『やはり！我々の技能は海斗殿には既に訓練時に見られているので、機体のインパクトで押し切るのはどうでしょう！』

『我々の技能と言ってもなあ…』

『どうしたんですか？…あつ』

そうなのだ。あいつは戦闘機の動きを数回見ただけで模倣するのだ。

普通ならば熟練の兵が何とか出来るようになるレベルの技まで、

『完全に再現してる訳じゃ無さそうですがそれでもアレをやられると驚きますね』

『ほら話が逸れてるじゃないか、どのような機体があればいいかを話してたろ』

『そんなこと言っても改造整備は俺達じゃなくて整備班の連中の仕事じゃないか』

『それもそうか…じゃあこんな武装があつたらで行こう』

『それなら私から行きませう！誘導ミサイルとかどうでしょう！』

『漫画に影響されたか？ターゲットロツクする機械なぞ載せられないぞ』

『ロツクを全部海斗に押し付ければ…』

『あいつが過労死するから辞めてやれ。次』

『では弾種をvt信管に…』

『いつその事艦載機にも巨砲主義を持ち込むとか…』

こうして出た案を紙にかきつつ、妖精達は夢中になって案を出し続けた。

## 2時間後―

『ん？ああもうお昼か、おいお前らお嬢にドヤされるまえに食堂に行くぞ』

『了解!!』

side out 隊長

side ???

静かになった大部屋にひとつの小さな影が入って来た

『随分と楽しそうな話をしてましたね。ふむ…これは機材が充実してる所があれば作れそうですね。こっちは…今あるものでも作れますね。ふふふ、明日あの人達の驚く顔を見るのが楽しみです』

side out ???

side 隊長

あの後部屋に戻ると紙が無くなっていたが、特に気にするものもいなかった。

次の日に機体の点検をしようとした時に、真新しい50m機関砲と共に、『ご注文の巨砲、確かにお届けしました。これからも天海商会をご鼻屑に』

という紙を見つけ、揃って呆然とした。

発艦の時に聞いた話によると艦爆隊、艦攻隊も似たような話をしてたらしい。結果艦爆隊は赤外線誘導式の爆弾が送られ、艦攻隊はソナーによるホーミング魚雷が送られ

た。どうやって一夜のうちに全員分の新装備を作れたのかは考えたくもない。

《隊長！なにかトラブルですか?!隊長!》

『ん？ああ済まない、少し考え込んでしまっていたようだ。』

《それならまあいいですが、そろそろ敵艦隊が見えてきますよ》

暫くすると遠くに黒い豆粒のような物が見え始めた。

1度見え始めたそれはどんどん艦艇の形を取り始めた。

『!!』

ありえない光景だ。そう思っても仕方ない。

何故なら今まで軍艦に乗った深海棲艦などいなかったのだから

『緊急連絡！敵艦隊に軍艦に乗った深海棲艦あり！繰り返す！』

敵艦隊に軍艦に乗った深海棲艦あり!』

無線機の向こうから息を飲むような感じがする。

《こちら海斗。状況に応じてこちらの武装を使う、決して無茶はしてくれないな。》

無茶はするな、か。相変わらずの甘ちゃんだな

『全機に告ぐ！この戦いから帰ったら俺は酒が飲みたい！そんなときに1人でも欠けている事は許さん！死んだら俺が地獄まで行ってもつかい殺してやる!』

《隊長！二度死ぬことは出来ません!》



《うわ、こいつこの空気でそれを言うのかよ》

《マジかよ勇者だ》

『…』

《フフ……キタンダア……？　へーエ……キタンダア……。》

『！誰だ！』

《アラ？人に名を聞く時はソチラカラ言うんじゃないノ？》

『…空母大鳳所属の妖精。周りからは隊長と呼ばれている』

《フーン隊長…ね。私ハ防空棲姫》

『防空棲姫か、艦艇に乗った深海棲艦など初めて見たぞ』

《そりゃあコレが完成シタノツイ最近だモノ。中々イイデキデシヨ？貴方達の艦長が  
好き放題シテクレルカラ工程が早めらレタのヨ？》

『有難いことだ。それだけ我々がお前らの脅威足りうるという事だからな』

《アラ、随分と元氣ナモノね、コレカラ落ちると言うノニ》

『ハツ減らず口を、貴様なぞ我らで十分！』

《艦長サン？聞こえてるんデシヨ？貴方は手出し無用ヨ》

《…わかった》

《ソレジャアハジメマシヨオ！》

ダン！ダンダンダン！

防空棲姫の発砲を合図に戦闘は始まった

『クソっ全機散開！見た所敵空母は1隻だけだ！先に随伴艦を処理しろ！艦爆数機は——』

《了解！》

『艦戦隊！先に空母の艦載機を倒す！ついてこい！』

《りようかい！》

上がつてきた艦載機に対し、50mm機関砲を放つ。ドガン！という大きな発砲音を鳴らし、弾丸は敵機に吸い込まれて行った。

『コイツは肩がほぐれるな』

当たった端から粉碎されていく、20分もすれば空にいるのはこちらだけになった。

《フーン中々ヤルジヤナイ》

『次はお前だよ』

《カカツテラツシヤイ》

『テメーのその高角砲をお釈迦にしてやるよ』

ドガン！ドガン！

卓越した技術により狙い変わらず砲塔へ吸い込まれていく。だが、

『なに！』

弾丸は貫通すること叶わず弾かれてしまった

「私の装甲ヲ舐めるんじゃないワヨオ」

『くつ、ならばコレでどうだ！』

ドガン！

「何度ヤツテモ同じヨオ！」

『そいつはどうかな』

ガキン！ドゴオオン

くぐもつた音と共に砲塔から煙が吹きあがる

「何！」

『やつと慌てた顔を見せてくれたかい』

狙ったのは砲塔と砲身の隙間だ。内部で炸裂させれば装甲なんて関係ないからな。

なんとか上手くいった、これで一歩前進できる。

「こんな奇跡がナンドモ続くとオモウナイコトネ」

『それなら奇跡が起きるまで繰り返し返すだけだ。』

40分後

ヤバイ流石に燃料が無くなってきやがった。弾の残弾も心許ない

「ホラホラ気を抜いたらオチルワヨオ！」ドゴンドゴン  
『当たってたまるかあ！』

機体のすぐ横に弾丸はすり抜けていく。

『オラア！』ドガンドガンドガンドガン

50mmは煙突上部に当たり、根こそぎ吹っ飛ばした

「アラアラ狙いがアマイんじゃないノオ？」

『いや、これでいい、この状況を待ってたんだ！』

「ハ？ドウイウコトヨ」

『すぐにわかるさ』

随伴艦を片付けてくれた隊員は既に大鳳へ戻させた。だが、全てでは無い

ブオオオオオオン!!

俺とは別の機体のエンジン音が響く。上空から

『隊長！遅いですよ！』

『すまん、割と彼女とダンスするのが楽しかったんだ』

『カツコつけちゃって』

上空に待機させていた彗星は急降下爆撃を開始する。

『狙いはー煙突だ』

『任せろお！アンタのやったことに比べれば簡単だなあ！』

ガコン！ヒューーーーーー

投下された爆弾は先程開いた煙突の中へ入り、起爆した。

ドゴオオオオオオン！！

内部から受けた衝撃は艦全体に伝わり弾薬庫に誘爆、大爆発を起こした。流石に沈むだろう。

「まさか！あなたサイショからコレヲ狙っていたとでもイウノ！」

『は？んなわけないだろ、俺一人で倒すのがベストだった。コレはあくまでも最終手段だ。使いたくなかったが』

この作戦は海斗の発言から思いついたものだ。訓練の休憩時に艦爆を見ながら、どんなに装甲が厚くてもどうにかして内部に入れられればワンパンできんじゃねえか？と言われたのが印象に残っていた。

《あーこちらは大鳳の第2艦長的な天海海斗という者です。えーと

防空棲姫でいいのかな？これ以上の抵抗の意思はあるかい？》

「流石にソレハない。元々お前らの事が気になつて喧嘩フツカケタヨウナ物だからナ。十分戦えたから満足ダ」

《それなら良かった。では俺からの提案を聞いてくれないかい?》

「提案ナンダ? 言つてミロ」

《なに、簡単な話だよ君は僕達と共に来る気は無いかい?…アイタツ》

『…』

「…」

防空棲姫まで黙つた。てかお嬢、今思い切り殴りましたよね?

《アイタタタ、んで? 答えはどうだい?》

「…何故敵ヲ自分の船に乗セル。」

《敵だからってだけで見捨てるのかい? 俺にはそんなつまない事は出来ないね、特に

美人さんならば言わずもがな、だよね。アイタツ》

「／／／／」

嘘だろ深海棲艦が赤面してやがる!

《俺の理由は以上だよ。まあうちの妖精は君の船を解析したくてウズウズしてるみたい

だけど》

「はあ…ワカッタワ、私は貴方にツイテイク。貴方の仲間ニ危害ハ加えない」

《了解した。これからそっち行くからちよつと待つてねー》

『我らはもう戻つてもいいか?』

《もちろんリーダーで場所はわかるからな。よくやってくれた、お疲れ様》  
『おう!』

## 10話 高校生は深海棲艦を案内するようです 前編

最初は無線から聞こえた報告に艦内は騒然となった。

今まで深海棲艦側の軍艦など発見された事が無いと聞いていたからだ

しかもこちらの回線に割り込み、防空棲姫と名乗ったのだ。

その上で隊長の挑発に乗るといふ行動を取った。

俺には感情がある様にしか感じられなかった。

ここ数日で戦ってきた深海棲艦にハッキリとした意思は感じ取れなかった。どつちかと言うとただ敵に向けて突撃してくる感じ。

だからこそ興味を持った。

だからこそ手を出すなど言う要求にも従った。

まあ、隊長が勝つだろうとは思ってたからつてもあるんだけど、てか外側からダメなら内部からとかエグい事考えるなあ

「さて、こちらに攻撃しないって約束も取り付けたし、近寄るか、いやーこんなに早く機会が訪れるとはねー」

「やりそうとは言いましたが、いくらなんでも早すぎませんか？」



「善は急げだよっ！キラッ☆（ゝω・）V」

「はあ、貴方達の突飛な行動は初めてではありませんしいでしょう、隊長さん達を回収してから船を防空棲姫に寄せます。」

「ありがとうやってくれ…あれ？俺の行動はアイツらと同レベルなの？おーい」

10分後

『いやー今回は驚いた。まさか軍艦持ちが居るとは』

「隊長、改めてお疲れ様。彼女はどんな感じだい？」

『落ち着いてはいるが、船はそろそろ沈むんじゃないか？』

「おっとそれは急がねえと」

お、いたいたもう半分ぐらいは沈んでるな

「おーいお前艦装はどうした？」

「ワタシノ艦装はコノ船と同期している状態ダ。コイツが壊れれば私ノ艦装モ壊レル」

「つまり航行不可と」

「ソウダ」

「取り敢えずハシゴおろすから上がってこいよ」

「頼ム」

凄いな、あつという間に登ってきた

「改めて自己紹介をするか。空母大鳳の第二艦長をやっている天海海斗だ」

「私ハ防空棲姫だ。イキナリで悪いがナゼ艦長が二人いるんだ？」

「この船が艦長2人居ないと動かせないから」

「なるほどわからん」

おっ？ 深海棲艦もネタを使うのか？

「私が第一？ 艦長の大鳳よ」

「お前がああの航空隊を育てたのか」

「え、あっはいそうですけど」

「素晴らしい腕前だった。私が防空で負けたのはあれが初めてだ」

「深海棲艦に褒められるのは慣れてませんが、はい、ありがとうございます」

「ウチの妖精達に防空棲姫の船を解析させてもいいか？」

「構わない、その代わりこの船のことを教えて欲しい。それでも構わないか？ 海斗」

「あまり機密は話せないがそれでいいぞ」

「…決まったことですし船体を回収しましょうか」

「そーいや沈みそうだったなどどうするか…あっそうだ」

ガコン！

一つ 船体に青い線が無数に走り、縦に割れた。

二つ 側面がまるで翼のように広がった。

三つ 艦橋は中央へ、甲板が後ろへスライドしカタパルトが出現した。

四つ 奥に見える発射口から等間隔でリングが浮かんでいる。

「……」

「これで船体の間に防空棲姫の船を浮かべれば解決だな！」

「海斗さん馬鹿ですか？」

「私はもしかして手を出しては行けない何かの手を出したのか？」

『初めての発射形態が運搬に使われるとは思いませんでしたです』

「え？ダメ？」

「ダメ（です）」

「そっかア」

船は大人しく横につけてワイヤーで支えた

く食堂く

「ここが食堂だ。ちようどお昼時だし昼ごはんにしよう。この料理は美味しいぞ」

「料理？おい海斗、なんだそれは何かの食べ物か？」

「ん？防空棲姫は料理を知らない」「ちよつとまったああ！」

「…のか？」

「急に叫んでどうしたんだ？大鳳」

「あなた！さっきから何様の分際で海斗さんの事をか、かかかかか海斗なんてよよよびすてにしているんですかあ！」

「は？」

「会ったばかりのくせに図々しいです！私なんてまださん付けでしか呼べてないのに！」

「私が艦長と呼ぶのはおかしいだろう？それと同じで提督も司令官も違う。ならば名前と呼ぶしかない。ただそれだけだが？」

「ううう〜」

「取り敢えず深呼吸して落ち着け、別に俺の事を呼び捨てにするのは構わないからさ、それに妖精達も見てるから、な？」

「……え？」

そうなのだ。今は昼時余程のことがない限り昼飯は一緒に食べる。

よつて彼らはほぼ全員ここにいるのだ。

目を見ればわかる。大半がおかんの雰囲気を出し、一部が『おいバカ辞めろ』と考えるな、だが辞めない！

「(。)>?<(。うわああああん！」ダダダダダ

「おっおい待て!…行っちゃまった。いいのか?海斗アイツを追っかけなくて」  
「うーん流石に昼ご飯抜くのは辛いだろうし、後で何かつくって持っていくよ」  
「いや問題はそこじゃない気がするぞ?」  
「ん?そうなのか?」

妖精が防空棲姫に何か話してる?何だか防空棲姫にこちらを見る目が残念な奴を見る目になってる気がする。

「間違つてはないから原因は自分で探すんだな」

心読むの流行つてんの?

『あのーご飯は食べないんですかー?』

「あつごめん食べるよ、いつものセット二人分お願い大鳳さんは俺がやるから」

「了解しました。とびつきり美味しいのをつくってあげてくださいね」

「?料理するなら美味しくなるようにするのは当然だろ?」

「そういう意味ではないんですが…まあいいです」

「??」

防空棲姫は初めて見る魚料理に警戒していたけど

思い切つて一口食べたなら止まらなくなつてた。

和食の沼にハマるが良いぞ

後編へ続く

## 11話 高校生は深海棲艦を案内するようです 後編

昼ご飯も無事に終わり、防空棲姫の案内は続く。

「驚いた、料理というものは美味しいな！」

「それは良かった、さて、飯も終わったし次は何処を見たいかい？」

「ならば格納庫を見てみたい」

「うーん、まあいいぞ今なら出撃後の整備でもやってるんじゃないか？」

↓格納庫

「なんだ？向こうでいいあつてるのは誰だ？」

烈風を置いてあるあたりで整備班の妖精達と天海ファミリーの妖精達がギャーギャー騒いでいた。

「おーいお前から何言い争ってんだ？」

『海斗さん！聞いてくださいよ！こいつらが増設した50mm機関砲の反動で烈風の翼がもげる寸前だったんですよ！』

『かいとーそれは僕達の責任じゃあないと思う。だって頼まれたものを作っただけだもの』

『それが問題なんですよ！まずあんなの依頼でもなんでもない只の希望じゃないですか！』

ギヤーギヤーギヤーギヤー

うーんこの

「それじゃあさ、取り敢えず烈風の50mm機関砲はやりすぎだ。それは下ろして20mmを30mmに換装でもしてろ」

『それならばまあ…』

「それで流星と彗星の翼下に50mm機関砲を載せて機体を補強すれば問題ないだろう？」

『その程度の改造ならばこの材料で出来るかと』

「んじゃまあこれで解決だな！弾薬はvt信管でも使って見たらどうだ？無理だろうけど」

『それは我々への挑戦ですか？やっつてやりますよ』

『おい、整備妖精ここの設計部分手伝え』

『いいだろう私たちの力見るがいい』

ギヤーギヤー

騒がしいのは変わらないが内容は解決したしこれで良し。



「さて、ここにいても俺達は邪魔になるだろうし…?」

防空棲姫は、話に入りたそうに、あちらを見ている！

何となく察した

「…あー防空棲姫?もしかしなくてもアイツらに混じりたいか?」

「…うん」

「別に構わないぞ?」

「ほんとか!」。\*。\*( \*・▽・\* )。\*。

「何か変なことされたら面倒だが、アイツらがそこを見逃すことは無いだろうからいいぞ?」

「ありがとう」

「気にすんな、終わったらそこら辺の妖精に俺の居場所を聞いてくれ。ここにいる間の

お前の部屋案内するから」

「わかった」

そう言つて防空棲姫は妖精達の方へ走つてつた。あいつらも驚いてはいたが、直ぐに慣れたようだ。

こちらの技術が流出するかもしれないけどこちらと深海棲艦の技術が合わさったらどうなるのが普通に気になる

「あいつら満足するまで辞めなさそうだし俺は大鳳さんの方に行きましようかね。

厨房を借りて作った料理を持って部屋へ向かう。

調理中に『お嬢は幸せ者ですなあー』と言ってる妖精が何人か居たが

どういう意味だろうか？

今大鳳さんと俺が寝ている部屋の前にいる。ここだと思った理由は特には無いが、他のところだと誰かしらは入ってくるだろうからここだろうと考えただけだ。

「大鳳さん居ますか？海斗です」

「…なんですか」

「お、良かった当たりか

「大鳳さん昼飯食べ損ねてるでしょ？だから色々つくって持ってきたんだよ」

「いらぬです…」

「ちゃんと食べないと体に悪いですよ、というか何でそんなに拗ねているんですか」

「拗ねてなんかないです」

「それ拗ねてますよね？さつきも俺言いましたけど呼び捨てで呼ぶこと自体は構わないんですが」

「……………から……………さい」

「えっと、なんですか？」

バタン！

「私も呼び捨てで呼びますからあなたも私の事を呼び捨てで呼んでください！後その敬語要らないです！」

いきなり飛び出したら驚くじゃん：それよりさん付けはダメか！

んーまあ本人がいいって言ってるからいいか

「大鳳。これでいいか？」

「！ええ、これからもよろしくね、海斗！」

「ああヨロシク。ところでご飯は食べるかい？」

「頂くわ」

「はいよ召し上がれ」

「パクツ：とても美味しいわ！毎日でも食べられそう」

「そりや良かった。また今度何か作ろうか」

「私も料理を試してみたい！教えてくれる？」

「ああ、いいぞ」

「ありがとう！」

3 時間後

コンコン

「はーいどなた？」

「海斗はここにいますと聞いて来たのだが？」

「防空棲姫が開いてるから入ってきていいぞ」

「そうかじゃあ入るぞ…つてそれはどうした？」

大鳳（ω） スヤア：

「ご飯食べて眠くなつたみたいだね」

「お前から夫婦にしか見えないんだが」

「俺達がないない大鳳は俺には勿体ないくらい美人だよ」

「他の女が呼び捨てで呼ぶことに嫉妬してる時点で確定なんだよなあ」ボソツ

「なんか言つたか？」

「いやなんでもない、それより残りの案内を頼む」

「はいよ、大鳳ちよつと起きてくれ」ポンポン

「ふえ？」

「防空棲姫に部屋の案内するんだけど来るかい？」

「…行くわ」

「おっけ、じゃあ行くか」

↓艦内廊下

「所で何故私に部屋を用意するんだ？捕虜のようなものだから独房にでもぶち込めばよからう」

「俺はこの時代に来たばかりだからな。深海棲艦に対する恨みとかわかんないし、まず一般人にいきなり独房にぶち込む考えは出ない」

「そんなものか」

「そうそう」

「説明端折り過ぎてわかってなさそうですよ？」

「何とかなるなるつと、着いたぞ」

「ここか」

「うん、家具とかは置いてないけど1人でいたいとかあったらこの部屋ね？ところで深海棲艦って眠るの？」

「普通に眠るが地面の上とか海の底とかでしか寝たことが無い」

「海底で寝るとか体どうなってるの？ここでは布団を敷いて寝るんだよ、こんな風に」  
布団の説明をしながら実際に敷く

「なるほど、何となくわかった」

「これで一通り案内しようと思ってたところは終わったけど、他に知りたいことはあるかい？」

「特に無いぞ」

「じゃあ後は自由時間でいいぞ。夕飯は1900だからその前後にでも食堂に来てくれ」

「わかった」

―時は進んで夜―

「…少し外に出るか、悪いけどここにいてくれないか？」

「わかったわ」

航行をシステムに任せ、甲板へ向かう。

「やっぱりここにいたか」

そこには防空棲姫がいた

「…海斗か、何故私がここに居ると？」

「別に？狭い部屋にいるより空が見えるところの方が好きだろうと思っただけさ」

「そうか」

「そうさ」

「…貴様に聞きたいことがある」

「なんでもどうぞぞ？」

「貴様は先程話した時にこの時代に来たばかりと言ったな」

「ああ」

「何年前から来たか当ててやろう…20年前じゃないか？」

「よくご存知で」

「私も資料しか見れてないから詳しいことは知らん。恐らく貴様が巻き込まれたであろう事故。あれは深海棲艦が原因だ」

「深海棲艦の侵攻はその数年後じゃなかったか？」

「斥候だ。こちらの手勢が陸へ偵察へ行つた。初めて見るものが多かったのだろう、はしゃいで酒を飲んだらしい。しかも動かし方を知らないトラックに乗つた」

「何？・飲酒運転ダメ絶対って言葉知ってる？」

「その結果トラックで俺が乗つてたバスに突っ込んだと」

「多分な、ついでに言うとな事故現場からは1人だけ遺体が見つからなかったそうだ」

「俺かもな」

「記憶も死ぬ寸前までは持つている」

「何故死んだお前が今生きてここに居るのかは分からない、帝様に聞ければ分かるかもしれないが」

「帝？」

「我々深海棲艦の親玉さ」

「成程」

「実際に会ったことはないがな、制海権を確保せよと全深海棲艦に命令したきりだ」  
「ん？人類殲滅が目的じゃないのか」

「知らん、その先に何かあるかもしれないし無いかもしれない」

「知りたけりや会うしかないかあ」

「所で、お前の死因は深海棲艦だったが、それでも私に対する考えは変わらんか？」

「変わらないね」

「そうか」

「そろそろ俺は戻る。お前も程々に寝ろよ？」

「わかった、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

再びひとりとなった甲板。

風になびく髪を抑えながら防空棲姫は独りごちる

「あの大鳳とかいう艦娘。深海棲艦に嫉妬とは面白いことをするもんだ。海斗もあんな事を言われては思わず欲しくなってしまうじゃないか」